

# ヤママユの美と迫力 たまらない

いま No.1438  
子どもたちは  
昆虫LOVE 9

ヤママユはヤママユガ科の蛾。「天蚕」の名で知られる。幼虫は、桑の葉ではなく、クヌギやコナラなどを食べて薄い緑の繭を作り、糸は光沢のある、鮮やかなもえぎ色だ。

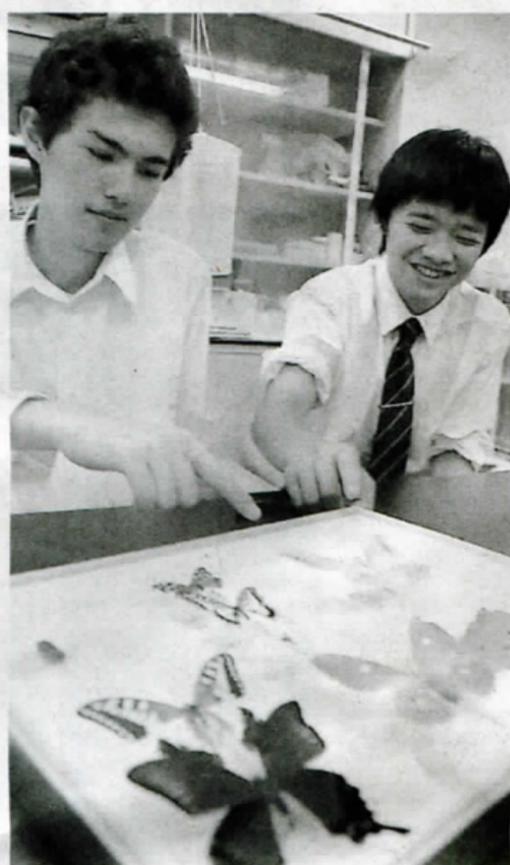
「幼虫も緑色をしています。たまらなくきれいです」。山崎さんはそう話す。

曾祖父の別宅があった長野県で、幼い頃から昆虫採集を楽しんだ。捕まえた中にヤママユもいた。「ヤママユを自分で羽化

させてみたい」。そう思い、中学生の頃、幼虫から育て始めた。家の庭で、エサとなるクヌギも育てた。ところが、さなぎになる直前、ある幼虫が黒く変色し始めた。瞬く間に他の幼虫にもうつり、全滅。ウイルス性の病気だった。「どう防ぐのか。難しい道のりです」

もう一つ、うまくいかないことがある。ヤママユは5月上旬ごろに幼虫になる。「二期作」の考えで、8月にも幼虫から育てられないかと思ったが、生存率は低い。どうしたら生存率を上げられるか。高校では、そんな研究をしたいと思っている。阿部さんは、別のルートからヤママユに魅せられた。

昨年、「春の三大蛾」の一つ、ヤママユガ科のエゾヨツメをネットで見た。はねにある玉のような柄の青色が特徴だ。夏休みに早速、栃木県に採集へ。「手のひらぐらいの大きさがあつて、迫力がすごかった。完全にはまりました」



阿部翼さん（左）の標本。山崎笙さんとともに指さすのがヤママユガだ＝東京都世田谷区

ヤママユの仲間には、野生種では、日本に10種以上いる。「南西諸島に生息する以外を、東京都内で集める」。そんな目標を立て、蛾が舞うシーズンは、採集に向く。残るは、薄いエメラルドグリーンが美しいオナガミズアオだけだ。

（山下知子）